

涼州詞（王之渙）
りようしゅうし
おうしかん

黄河 遠く 上る 白雲の 間
こうが とお のほ はくうん かん

一片の 孤城 万仞の 山
いつぺん こじょう ばんじん やま

羌笛 何ぞ 須いん 楊柳を 怨むを
きょうてき なん もち ようりゅう うらむ

春光 度らず 玉門関
しゅんこう わた ぎよくもんかん

黄河遠上白雲間 一片孤城萬仞山
羌笛何須怨楊柳 春光不度玉門關

解説 遠く辺塞に出征した兵士の悲しみをうたった詩。

語釈 ※涼州詞Ⅱ樂府の題名。 ※遠上Ⅱ黄河の上流を西方へ遡って
いくにつれて地勢が高くなる。 ※一片Ⅱ一つの意。 いかにも危なげ
な砦一つ、の意。 ※万仞Ⅱ実数ではなく、非常に高いこと。 ※羌笛Ⅱ
羌族の吹く笛。 ※何須Ⅱどうしての必要があるうか、いやない。
※怨楊柳Ⅱ楊柳は折楊柳という曲のこと。 別れの曲である。 ※春光不
度Ⅱ度は渡と同じ。 西北の地は寒いので、春の光はこの玉門関までやっ
て来ない。 そのため、楊柳も芽吹かない、の意。 ※玉門関Ⅱ唐代にお
ける最も遠い辺境の関所。

通釈 黄河をずっとさかのぼって、遙か上流の白雲のたなびくあたり
に、一つの砦が高い山の上に立っている。 折から吹く羌族の笛は、折
楊柳の曲を哀切に奏でているが、そんな笛は吹く必要はない。 それを
聞いても悲しくなんかない。 なぜなら、ここは玉門関で春の光がやっ
て来ないのだから。（柳が芽吹くこともない、春の柳の芽吹くころの
別れをうたう歌を聞いても、こっちは関係ない）